

# ロバート

日本文学研究者 国文学研究資料館長

# キャンベル



キャンベル 私は2011年(平成23)

の東日本大震災のあと、宮城県の鳴子

温泉で、震災の被災者たちを中心に、

仮設住宅ができるまで数カ月、読書会

と一緒にやりましたが、そのことが

縁で、その後もずっと鳴子に行き続け

ています。震災直後は、その温泉郷の

ほとんどもすべてが被災者に占められて、

宿の主人たちは、まずその人たちのお

世話をすることで半年を過ごしました。

私は本当に小さな活動だったんですけ

ど、仲良くしている温泉旅館の主人が

いて、彼が事務局になって、被災者た

ちと一緒に読書をしていんです。そ

のことで繋がり、今は鳴子に文庫とい

うのも作ろうとしています。それを「な

るこ湯よみ文庫」といいます。

渡邊 湯浴みではなく、湯読みなんで

すね。

キャンベル はい。湯治と読書をして

いるんです。先日もワークショップを

鳴子でやったんです。枚数がある公衆

浴場があり、とても素敵な建物なんで

すが、そこを貸し切りにして。鳴子で

そういう、震災を通して我々が共有し

ている経験の中から、湯治と読書とが

深いところでつながっていて、大変良

いものだというので、実際に文庫を

今作ろうとしているんです。

書物が仲介する人間関係はとても愛おしく、  
かつ力強く、勇気を与えてくれます

テレビ番組のコメンテーターとしても知られるキャンベルさんは

本来、日本文学研究者。昨年からは国文学研究資料館の館長を務めている。

幼少の頃より親しんできた図書館と読書の大切さを語っていただいた。

聞き手●渡邊直樹 本誌編集長 写真●河野利彦

渡邊 確かに、心が豊かになるという

ことでは、温泉+読書というのはよい

組み合わせですね。

キャンベル あと、食も非常に重要で

す。東京で長年働いてから脱サラをし

た女性が、十数年前から鳴子にいて、

古民家を移築して、そこで地元的女性

たちと一緒に、半径2kmぐらいで採れ

た食材しか使わない、すごく素敵な店

を作っているんです。2月に「なるこ

湯よみ文庫」の一環として、小説家の

朝吹真理子さんを連れて行き、対談を

しました。仙台、古川、山形からも簡

単に来られるし、すごく面白いんです。

書物をはさむと、人は自由に  
コミュニケーションできる

渡邊 図書館は地域の人と人を結びつ

けたり、豊かにする公共施設として大

いに可能性がありますね。

キャンベル 私は去年東京大学を辞め

て、17年ぶりにここ(国文学研究資料

館)に来ましたが、教室で文学を教え

ることの大切さ、力というものも十分

に手応えはありますが、非常時におけ

る書物というもの、そして皆が書物の

ある場所に集まって交流することの大

切さは、東日本大震災のときにとても

強く感じました。

あの年の4月の末に被災地に行き、

沿岸部の避難所を回って、どういうこ

とができるかという予備調査を、仙台

や鳴子の友人たちと一緒に行ったんで

す。いくつか、レジュメみたいなもの

を作って、とりあえず東北の詩人とか

俳人とか歌人が作った、そんなに長く

ない作品、例えば白いものとかテーマ

を決めて、それにはカモメであったり、

白い紙であったり、雲を詠んだものと

か、とてもいい歌や詩などがたくさん

あって、白いものでつながるリードル

(読本)のようなものを作って持って

行ったんです。

そのときは老若男女がグラウンドみ

たいなところで日なたぼっこをしたり、

携帯の充電を待っていたり。ポランテ

ィアの人たちが炊き出しをたくさんし

ているので、自分たちもそれに関わり、

女性たちは昼間はずっと、救援物資が

届いたときの管理をしているんです。

その中に僕らもいて、昼食が終わった

直後にちよつと声をかけてもらって、

中学校の廊下だったり、グラウンドに

10人、20人ぐらいが集まって、皆でま

ず読み上げるということをしたんです。

中年以上の方は老眼鏡を流されてしま

い、文字を読めないんです。そこで、

本のフォントが大きくないといけない

ことがわかったり、具体的なことから、

何が不足しているのかわかりました。